

# プレイヤー

作 前川知大

演出 長塚圭史

出演 藤原竜也

仲村トオル

成海璃子

シルビア・グラブ

峯村リエ

高橋努

安井順平

村川絵梨

長井短

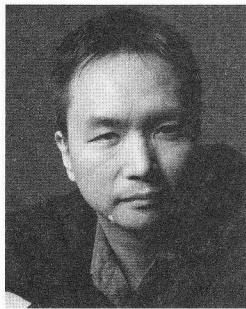
大鶴佐助

本折最強さとし

櫻井章喜

木場勝己

真飛聖



演出:長塚圭史

(ながつか・けいし)

「演出家脳/作家脳を持つ二人が、お互いの領域を邪魔しないようにしつつもさまざまな意見を交換し合い、複眼的に作品に向かう豊かな打ち合わせを経ました。すでに刺激的な創作プロセスが始まっており、大きな手応えを感じています。」



作:前川知大

(まえかわ・ともひろ)

「約10年前に上演し、いつかもう一度やりたかったと思っていた戯曲『PLAYER』。ここに描いたある種の気持ち悪さや不気味さを長塚さんが面白がってくださり、新たな構造を加えてまたお客様に観ていただけることになりました。前とはまた別の角度で立ち上がる舞台を、僕自身、楽しみにしています。」

ともに劇作家・演出家として活躍している長塚圭史と前川知大。演劇界の次代を担うこの二人の共同制作が、初めてシアターコクーンで実現いたします！  
本作の制作にあたり、一年以上にわたる打ち合わせを重ねてきた二人。長塚が今、演出家として興味を持っていること、前川が好んで書き、今回の戯曲に盛り込もうと思っていた表現方法が奇しくも合致。それぞれ独自の世界を築いてきた同世代の二つの才能が出合い、どのような舞台が生まれるのか。  
本作の基になるのは、2006年に前川が全作品の作・演出を手掛ける劇団「イクウメ」で初演された戯曲『PLAYER』。謎の死を遂げた女性が生者を通じ、死後の世界から語りかける――死者の声が、選ばれし者(Player)の身体を利用して再生(Play)されるといふサイコホラーは話題を呼び、チケット入手困難な公演となりました。  
ふたりが組む作品にと前川が提案したこの戯曲『PLAYER』に触発された長塚は、生者が死者の再生装置となっていく戯曲『PLAYER』を、俳優たちが劇作家の言葉を再生する「Play」を重ね、より大きな物語として構成できないかと構想。戯曲『PLAYER』を劇中劇として取り込んだ全く新しい作品『プレイヤー』が誕生いたします。

## プレイヤー 記憶という死者を、再生する

ストーリー

舞台はある地方都市の公共劇場、そのリハーサル室。国民的なスターから地元の大学生まで、様々なキャリアを持つ俳優やスタッフたちが集まり、演劇のリハーサルが行われている。演目は新作『PLAYER』。幽霊の物語だ。死者の言葉が、生きている人間を通して「再生」されるという、死が生を侵食してくる物語。

物語は劇中劇と稽古場という二つの人間関係を行き来しながら進んでいく。死者の言葉を「再生」すること、戯曲に書かれた言葉を「再生」することが重なる。単なる過去の再生ではなく、今を生き始める死者と、戯曲の言葉に引き寄せられ、アドリブで新たな言葉を紡ぎ出す俳優が重なる。

演じることで死者と繋がった俳優達は、戯曲の中の倒錯した死生観に、どこか感覚を狂わされていく。生と死、虚構と現実の境界が曖昧になっていく。

